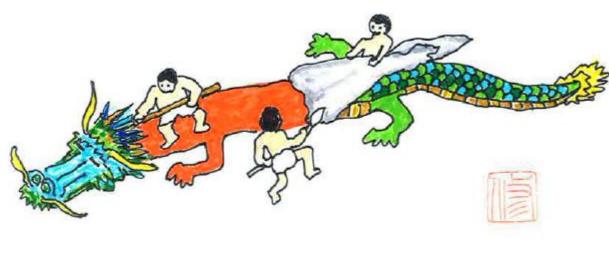
「竜のはなし」

文・絵/熱田区・淳徳寺 いとう 修

杯たべられるかやってみたい」と言い続けていた小学校四年生の 三人だけ、 (男子)を連れて、夏休みのおわりごろに盛岡へ出かけた。爺婆と孫 いまから二年ほど前の夏、「本物の〝わんこそば〟 初めての旅行である。 が食べたい。 何

息子に頼んで安い航空券を手に入れた、 連れて行ってあげようという何とも身勝手な 賢治記念館」へ行くことを条件に爺ちゃんが といえば、宮澤賢治(一八九六~一九三三)。「宮澤 そかに楽しみにしていたことがあった。 わけである。 名古屋空港から花巻空港へ。 わずかな年金を少しずつ貯めて、 実は 花巻 とい

記念館到着。すぐ目にしたのが、『竜のはなし』 ばのあの激しい食べ方、「婆ちゃんとバトル ようだった。空港の案内所で記念館へのアク だ!」と意気込んでいる。 上げられていた。「この話はおとぎ話ではあり 有名なのだが、 セスをたずねて、まず私が楽しみにしていた 孫は楽しそうにはしゃいでいた。 った。賢治といえば『雨ニモマケズ』 意外にもこの話が正面に取 夕飯が待ち遠 わんこそ



ません」 という、 賢治の言葉から始まる、 とても短 い童話である。

話。 が、 剥がれ、 味や本質を深く問いかけてくる。 の竜の優しさ。 したり悪 許すこと、受け入れること、 や動物 ついにはお釈迦様になって人々を本当の救いへ 虫に身体をついばまれても静かにこらえ、 いことをしない」と心に誓う。 か ら恐れられ 賢治の仏教への絶対的信頼が読む者に る 匹 の竜。 自分の命さえ投げ出す痛ましいまで ある時、 皮が奇麗だからと猟師に皮を 「もう、 やがて死ん と導く、 「優しさ」 動 物 そん や人を脅 で の意

る か 講話を聴いていたに違いない。 さを持ってしても、真宗に向かわなかったのは何故か、それを確かめ 北まで招き、 当時有名な真宗僧侶 か 0 つ 宮澤賢治は法華信者であ つ が私 触れ 信は人を通じてしか伝わらない。賢治の痛ましいほど このあたりに謎を解くカギがあるように思う。 の課題でもある。 歎異抄講話会を催すような人であった。賢治もまたその 教化された人は多いと聞く。 例えば暁鳥 当時の真宗近代教学を代表する暁鳥 っった。 しかし、 敏(一八七七~一九五四)をわざわざ東 実家の父は熱心な真宗の 彼は真宗の聞法者にはならな しかし、 賢治はそうではな 聞法者で、 の優 敏

れて行 きた は か尋ねるとイオンのゲームセンターだと言った。婆ちゃ ってもらって、 んこそばをたらふく食べて満足そうだったが、翌日何処へ行 私はホテルで賢治の作品にひたった。 6